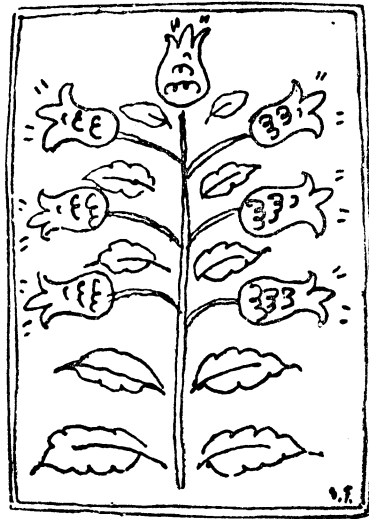




孕 女

上 司 小 劍

今日は花電車が来るといふことで、子供たちは朝から騒いでゐた。花電車は時々出るのだけれど、この支線は如何にも邊鄙で、昔しの鐵道馬車を造り直したらしいボロ車臺が、途切れ途切れに通つてゐるのだから、雨の日などは屋根から漏つて、電車の中で傘を擴げたいほどだ。それで今まで花電車など、一度も来たことはなかつた。

『晝一度と、夜一度と、二臺だけ来るんでございますッて。』と、妻の静江はさながら大事件でも告げるやうな風で、夫の新太郎に言つた。

郊外でも此の邊りは一寸町の形になつてゐて、今日は表が何んとなしにざわ／＼した。着物を着更へた子供だちが連れ立つて通つた。二三日すると、お上から御馳走を頂くのだといふことで、其の折りの支度に拵へた立派なフロクコートを何處となく不恰好に着て、落ちつかぬ様子をした緒ら顔の身長の高い村

長も通つた。

『今日はあ正午に何か御馳走しなければならぬでせうね。……お隣りでは赤の御飯をお炊きになるんですって、それから甘酒と普通のお酒に胡麻を入れたのを徳利に入れて、ちやんと床の間に飾つてありますよ。』と、静江は郷里から到來した松茸の裾分けを持つて行つた時、隣家で見えて來ることを話した。

『隣りは租税を喰つて活きてるんだもの、それくらゐのことするのは當然だ。』と、新太郎は嘯くやうに言つて、毎朝制服制帽で靴を鳴らしつゝ勤めに出て行く、隣家の主人の遅し氣な姿を思ひ浮べた。

『阿母さん、家ぢや旗出さないの。』と、七歳になりながら年弱で、來年にならなければ學校へ行かれぬ夏雄が表から駈け込んで來て、鳩のやうに眼を圓くしながら母に訊いた。

『あゝさうか、俺が出してやらう。』と、新太郎は大きな瀬戸物の狸の腹鼓みたいに膨れた火鉢の前から立ち上つて、村の若い衆に三十幾錢で賣り付けられた俗惡な彩色の丸提灯と、白金巾に赤く圓形を染めた小旗とを持つて表へ出た。

『それぢやないの、もつと大きい旗。……』と、夏雄は力の籠つた聲で言つて、父の後から隨いて出た。表の家々は皆提灯と旗とで飾り立てられ、無性なおカミさんの居る桶屋の前までが、綺麗に掃除をしてあつた。新太郎は村の若い衆が提灯を引つかける二尺ばかりの細い木を軒の正面へ打ち付けやうとした時、大聲で叱り飛ばしたことを思ひ出しながら、門の柱からまだ離れて遙か横の板塀の上へ打ち付けさした細い木の一寸釘へ、下手な意匠の提灯を吊るし、鎮守の祭りの時には造花を挿すやうに作つてある上部の穴へ小旗を突き挿した。夏雄は右から左から、其の提灯と小旗とを眺めては喜び勇んだ。

空は曇つてゐるが、雨にはなりさうにもなかつた。何時までもぽか／＼と暖くて、十一月だといふのに冬になつたといふ氣持ちは起らなかつた。提灯と旗として低級な世間並みの仲間入りが出来たのだと思つて、新太郎は赤の中へ黒く烏を現はした家々の提灯を一つづゝ見てゐた。向ふの家は建仁寺垣が長くて、往來からズツと引ッ込んだ門には、建物に釣り合はぬ大きな中古の日の丸の旗を二本、ちゃんと又に組んで、紫の總て麗々しく結んであつた。

自分の落ちついて居られるところは、矢張り書齋の外にはない。と思つて、新太郎はそこ／＼に家の内へ入らうとすると、静江が奥から、眞新らしいメリンスの布片を持ち出し、

『あ、あなた安いもんですね、六十五錢ですよ。私もつと高いものかと思つてたわ。』と言ひ／＼、颯と擴げたのは、二尺四方ほどの日の丸の旗であつた。

『到頭買ったね。……』と新太郎は笑つて、白地に鮮かな赤の色の映える妻の手元を見込んだ。

『だつて先の家みたいに引ッ込んでるといゝんですが、此處は往來ですし、それに今度は何處でも皆出してるんですもの。……家は門が大きいから、旗を出さないと目立つて仕様がありません。……安いもんぢやありませんか、これが六十五錢で、あの竿が二十錢、兩方で一圓出ないんですもの。』と、静江の指さす

物置の方を見ると、成るほど黒くだんだんに塗つた竿が其處に立てかけあつた。

『何時だつたかね、二三年前の正月に行つて見たら、S君の家ぢやア赤いメリンスを物干竿の先に付けて出してたッけ。……區役所から旗を出せ／＼ツて来るんで、旗はありませんから、これを出しますと言つて、赤いを出したんださうだ。……そんなものを出すより、白いを出し給へつて言つてやつたことが

ある。』と、新太郎はまた笑つて、井戸端にまだ咲き残つてゐる白いコスモスの、哀れ氣に瘦せた姿を見てゐた。

『あッ、忘れた。』と、静江は頓狂な聲をして奥の間へ引ッ込んだが、嬰兒の頭ほどの大きさの金色にきら／＼光る玉を持つて來て、旗の支度にかゝつた。

『もうあそい、始まるよ。』なぞと口々に言ひつゝ、着物を着更へた男の兒や女の兒が、二人三人表を走つて通つた。それをば羨ましさに門の外で見送つてゐた夏雄は、急いで駆け込んで來て、

『阿母さん、早く旗出してよう。』と、母を促し立てた。

新太郎は書齋へ入つて、昨日着いたばかりの新しい書物の頁を樂しさに切つてゐると、やがて近く

の小學校で唱歌をうたふのが、わアと聞こえた。

いつもの魚屋が、殊に威勢の好い聲をして、勝手口へ來てゐるやうであつた。

『……幾十年前に比べて、世界の富は幾百倍に殖えたが、それと反比例して貧民の数はずん／＼増して行く。……』といふことが、其の書物の或る頁に書いてあるのを、新太郎はチラと讀んだ。

二

午後になると、何やらの廣告の樂隊が、賑やかな響を立て、この郊外へまで繰り込んで來たので、夏雄は毎晩母に教はつてゐる片假名をば、其の日の紙數のドツサリある新聞に見出して、『ミ、ル、ク、キ、ヤ、ラ……』と讀んでゐたのを放り出し、周章てゝ表へ飛んで行つた。

暫くすると、夏雄が開けたまゝ、行つた臺所口の腰高の障子の外に人影がさしたので、茶の間に居た静江が、首さし伸べつゝ、誰れか來たのか、夏雄が戻つたのかと思つて、窺つてゐると、外の人影はもじもじしてゐるらしく、

『どなたですか、……夏さんか。』と、静江の呼ぶのを待つてゐた風で、漸くまゝの姿を現はした。

『おや、お桂さんかい。』と、静江は言つて立つた行つた。

『あんまり御無沙汰致してすひましたもんですから、伺ひにくうなりまして、……』と、ボロが下つてゐないといふだけの袷に、娘の着るやうな絆纏を引ツかけた小作りの老婆が、頭だけは小さな丸髷を結ひ立てにして、小腰を屈めつゝ、流し元の揚げ板の前で眼をしよぼ／＼してゐた。

『さアお上りよ。』と、静江は言つて、老婆の頭から足の先きまでを見下ろした。

『御免下さいまし。』と、老婆は漸く揚げ板の上まであがつて、其處へ蹲まつた。

『お桂さん、そんなとこに居ないで、此方へお出で。』と、静江は促し立てるやうにして、老婆を引き上げた。老婆は怖いところへても連れて行かれる風で、廊下を横切りつゝ、茶の間の敷居際まで來て、ベタリと座ると、それから先きへは挺でも進まなかつた。さうしてまた丁寧に頭を下げて、長口上の挨拶をした。『お嫁さんは何うしたね。』と、静江は煙草盆を出してやりながら、世間話のやうにして訊くと、老婆は、急に力み出す風になつて、

『到頭出てまゐりましてございます。』と、右の手の甲で細い眼を擦り／＼言つた。其の手は子供の時大火傷をしたとかで、手首のところが一面の痕になつて、自由には屈まなかつた。

『それやまア好かつたね。……しかし半分はお桂さんがいびり出したやうなものだね。』と、静江は微笑みながら、有り合はした茶碗に番茶の出がらしを汲んでやつた。

『赤ん坊が亡くなりますし、悴は意氣地がないしするものでございますから、見切りを付けたんでございませうが、悴は一圖に私がいびり出したやうに申しまして「婆アいゝ加減にくたばつて了へ」なんて、あなたそれから申しますものは、私に優しい言葉一つかけて呉れたことがございませんのです。』

『へえん、あの溫和しい息子が、そんな亂暴なことを言ふやうになつたかね。……變はれば變はるものだね。』

『變はりますにも何んにもあなた、全て牝鶏を取り上げた蹴合ひ鶏みたいで、二言目には物を投げて、碌に有りやアしない皿鉢を壊はしまして、……ほんとに。……』と、老婆はまた眼を擦つた。

『それは困つたね。しかし其の中には諦めて、また元のやうに優しくして呉れるだらう。兎に角あんなお嫁さんを貰つたのが、お桂さんとの不仕合はせの基だつたね。』

『左様でございます。貧乏は貧乏なりに、親一人子一人で、一つのを半分づゝ喰べ合つても、仲よくして暮らしてゐたのでございますが、嫁がまわりましてからは、二人で私を邪魔に致しまして、揚句の果がこんなことになるのでございますもの。……私も來年は六十でございますのに、年を取つて苦勞ばかり致して居りますやうぢや、寧ろ一思ひに汽車往生でも致しましたらと、つくづく考へるのでございます。』

『詰まらないことを考へたつて仕様がないうぢやないか。……其の中にはまた運が開けて來て、いいことも

あるよ。』

『さう思ひましてあなた、三十何年と申すもの、辛抱してまゐつたのでございますが、だん／＼悪くなるばかりで、いゝことつたら、これんばかりもないのでございます。……坊ちゃんのお生れなすつた時、半年ほどお宅へお手傳ひに上つてお世話になつて居りました間が、私の一生の極樂でございました。……手がこんでございませんと、奉公でも致しますのでございますが、片手では口入屋へまゐりまして、世話をして呉れないのでございます。……お宅でもなければお使ひ下さるところはございません。』と、老婆は泣き聲になつて、袂から汚らしい紙を取り出し、黒い團子鼻に押し當て、一寸横を向きながら、ずう／＼と涙をかんだ。

『それでも仕事には出てるんだらうね。息子は。……』静江は氣味わるさうに眉を顰めて言つた。

『これんとこ暫くは植木職人も閑でございましてね。親方の方へは毎日まゐるんでございませうが、手間は幾らも取れないんでございます。……それに此頃は友達の家や親方のとこで泊つたとか申しまして、歸つて来ない日がございますし、家へはお米を買ふお鳥目も置いて行かないんでございますから。……』

『それは困つたね。……』と、静江はちつと考へる風をした。折柄、

『阿母さん、花電車は今日来ないんだつて。……』と叫びつゝ、夏雄が表から駆け込んで来た。今朝初めて穿かした足袋を汚して来て、表替へをしたばかりの青い疊へ、泥を印けた。

『花電車は明後日まゐるんでございますつてね、坊ちゃん。』と、老婆は夏雄の逞しい姿を淋しさうに見て言つた。

『お桂さんよく知つてゐるね。』と、夏雄は眼を圓くして突つ立つた。

『坊ちゃん、電車はお桂の家の直ぐ横を通つとりましますもの。』

『さうか、ぢやあお桂さんは毎日電車が見られていゝね。』

『電車は毎日見とりますが、まだ一度も乗つたことがございません。』と、老婆は泣き笑ひをするやうな、變な顔をして言つた。

『へえん、ほんとうかね。……東京に居て一度も電車に乗つたことの無い人があるだらうか。』と、静江は感に堪へぬといふ風をした。

『話の種に一度は乗つてみたいと思つとりましますが、五錢玉一つございしますと、お米が無くて一日食べてゐられるだけお芋が買へるんでございしますもの。』と、老婆はさも腹が空いてゐるといふ表情をして言つた。

『それぢやあ、汽車にも乗つたことはないんだらうね。』と、静江は傍の茶簞笥から菓子器を出し、青柳の栗饅頭を二つ新聞に載せて、老婆の前に押しやつた。

『汽車に乗つたことでございますか。……ございせんとも、汽車の走つてゐるのを見たことも、此頃は滅多にございません。左様でございますね、永峰を汽車が通ります時分には、一二度見たことがございしますが、電車になりましてからは、一向見ませんのでございます。ほんとの長い汽車はお宅でお世話になつて居ります時、品川へお使にまゐりまして、たつた一度見たゞけてございます。』と、老婆は横眼で栗饅頭を睨みながら言つた。

『何んだいお桂さん、大人の癖に汽車に乗つたことないんか、駄目だね。……僕は始終乗つてらア、特別

急行にだつて乗つたよ、早いぜ。お桂さんなんか喫驚して了はあ。』と、夏雄は後から母の背中に縋り付きつゝ言つた。

『坊ちゃんは今にお身大きくおなりなすつたら、毎日でも汽車にお乗りになるやうな御身分に御出世遊ばすんでございますね。』

『さうだよ、僕は汽車の運轉手になるんだよ。…電車の方がいゝかなあ。』

『厭だね夏さん、汽車や電車の運轉手になつてたまふもんかね。…子供て何うしてから汽車や電車が好きなんだらうね。』と、静江は背後を振り向いて、夏雄の丸々と肥つた顔を見いゝ言つた。

『ぢやあ僕は海軍大將になつて、軍艦に乗らうかな。』と、夏雄は縁側の方へ出て行つた。

『けど珍らしいね、飛驒の山奥にても住んでるんぢやあるまいし、東京に居て、今時電車に乗つたこともなければ碌に汽車も見たことがないといふ人はね。…お桂さんも少し人間が變つてゐるね。前に家へ手傳ひに來てる時、そんなことチツとも言はなかつたぢやないか。』

『申し上げませんでございましたかね。私にはチツとも珍らしいことではないものでございますから。』と、老婆は横を向いて水漬を啜つた。

『まあ一つ其のお菓子をおあがりよ。』と、静江は栗饅頭を指さして老婆に勧めた。

『戴きますでございます。…勿體ない。』と、老婆は怖さうに栗饅頭を取り上げ、大事なものを扱ふやうに、そうつと二つに割つて、膝の上へ零れた餡を周章てゝ指の先きに唾液を塗つたので拾ひ取り、其の指を舐めて、先づ舌打ちをした。

『可味しいものを戴さますと、口の中がキューツと引つ張られるやうで、痛うございます。』と、老婆は幾つにも割つた栗饅頭の小さな破片を一つ／＼口に入れては、冷めた茶を少しづゝ飲んだ。

『宛て子供の飯事みたいにして食べてるんだね。厭だねお桂さん。』と、静江は笑ひながら、老婆のすることとを一つも見落すまいと云つた風に見詰めてゐた。

『こんな結構なお菓子が生れて初めて戴きました。此方様へても上らなければ戴かれません。勿體ない勿體ない。』と言ひ／＼、老婆は残つた半分の栗饅頭を先刻漬をかんだのらしい汚ない紙に包んで袂へ入れた。

『お桂さん、そんなことをしないで、皆な食べて了つたらい／＼ぢやないかね。……持つて歸るのなら、此方のをあげるよ。其處にまだ一つ残つてるし。』と、静江はまた顔を顰めて言つた。

『何う致しまして、これはお返し申します。』と、老婆は新聞の上に残つた一つの栗饅頭を汚ない手で押し戻した。

『阿母さん、僕にも何か頂戴よう。』と、夏雄は縁側から走つて來て言つた。

『夏さんにも栗饅頭をあげませうね。』と、静江はまた茶箆筥から菓子器を取り出さうとすると、夏雄は首を振つて、

『栗饅頭厭や、鹽煎餅がいい。……栗饅頭はお桂さんが食べてるぢやないか。』と、夏雄は老婆の方を見ひ／＼言つた。

『坊ちゃん、栗饅頭はお桂が戴いたので厭やだと仰ッしやるんでございますか。幾らこんな汚ない婆アが戴いたつて、可味しいものは矢ッ張り可味しうございますよ。』と、少し厭やな顔をして老婆は言つた。

『お桂さん、これも持つて行つて、お爺さんの位牌にても供へておやりよ。』と、静江はまた二つ栗饅頭を摘んで、前の残りを三つにして老婆の前へ押しやつた。

『いゝえ、飛んでもないことでございます。…それにあの人は御酒が好きで、甘いものは戴きませんでしたから、…』と、老婆は心持ち後退りした。

『あの入つて、お桂さん何處の人。』と夏雄はポリ／＼鹽煎餅を喰べながら、眼を圓くして訊いた。

『オホ、いゝ、坊ちゃんか。…若い時になくなりましたので、お爺さんと仰ッしやいまして、私には何んだか年寄のやうな氣が致しませんでした。三十七で亡くなりましたのでございまして、今では何んだか弟のやうな氣が致しとります。…人間も若死に致しますと、何時までも若くていゝぢやございせんかね。』と、皺だらけに萎びた乾柿のやうな顔の細い眼を三角にして笑つた。

『それでもお桂さんはなか／＼貞女だよ。死んでから三十年にもなるのに、毎日お爺さんのお位牌へ御飯を供へてるんだからね。普通の人には出来ないことだわ。』と、静江は煽てるやうにほめた。

『あの位牌を鼠が噛りましてございますよ。何んにも喰べるものがないものでございますから、鼠が位牌を引かうとしたんでございます。』

『あの位牌は小さいね。…家へ手傳ひに来てゐる時持つて来てたあれだらう。』

そして風も吹かぬのに、裏の物干竿がガタンと音して落ちたらしいので、静江は周章てゝ、縁側から庭下駄を突ツかけ、裏木戸へ廻はつた。空模様はだん／＼好くなつて、雨はいよく降らぬらしく、何處からか祝砲の音が、途切れてはまた聞こえた。

表に靴音がして、『郵便ッ』と呼ぶ聲がしたので、老婆は腰を曲げつゝ玄關へ出て行つたが、集配人と何か問答をしてゐる様子で、やがて一封の書状を持つて來た。

『奥様、お金を出してお受取りになりますか、お返しになりますかッて、郵便屋さんが申して、待つとりますてでございますよ。』と、縁側まで行つて老婆が言ふと、静江は庭先から戻つて來て、コート地の餘りでも拵へたらしい、派手なお召の前懸けて手を拭きく、

『何んだね書留、……あゝ不足税か、幾らだらう。』と、其の書状を取つて見たが、

『何んだね、お鶴からだよ。何うしたんだらう、……さアこれを郵便屋にやつとくれ。』と、帶の間から糸の巾着を取り出し、六錢の銅貨に書狀の附箋を剝がしたので添へて老婆に渡した。

『勿體なうございますね、ほんとうに六錢も。……』と、老婆は大事さうに銅貨を握つてまた玄關へ行つた。『××御奥様御許へ』と達者に紫鉛筆で書いた状袋の表書きは男の手蹟らしく、封を切ると、障子を貼つた紙の餘りと思はるゝのへ、普通の鉛筆で例のお鶴の讀みにくい字を並びわるく書いたのが現はれた。

『お鶴さんからでございますか、明盲でございますから、どちらからまゐりましたのかちツとも分らないのでございます。此方をお暇戴きましてから、お鶴さんは何處へまゐつて居るのでございます。』と、老婆は讀めもせぬのに首を突き出した。其處へ、郵便が來たらしい氣色を知つて新太郎が二階から下りて來たので、老婆は急いで廊下まで引き下がった。手紙の文句は、

日ましに御さむくなりましたが、御主人様始め皆々様には御かはりも有りませんでございますか、かげながら心配をいたして居ります、又いつぞやはけッこうな御品ものを下さいまして、有りがたうぞんじました、御禮にも上りませんで、申しわけも有りません、おく様ついては、うちで先月の十七日にてんぼうをたてにして、くにへふいにいッてしまひまして、今日くるか明日くるかと、あまりおとさたないので、二十九日にてがみをだしました、いきちがひに三十日にたよりが有りまして、山の上へひッこしなせとかいて有りましたので、さッそく皆さんのおせわになりました、ひッこして、いまか／＼とまッて居りますが、日にちのたつのは早いもので、もはや十三日目になります、きんじよへそば一つくばりませんのでございすから、あさはやくか、よるおそくなりませんければ、そとへはけッしてでません、皆さんが私のかほをじろ／＼みますから、まことにつらうございす、おこめは一つぶも有りませんし、五厘のお金さへなくなつてしまひました、先月の三十日からといふもの、わづかのおこめを大切におもゆのようにして、す／＼居りましたが、それさへてきなくなりまして、まいにちたへずに、よく口へいれますのは水でございす、たべずにないて、内にばかり居りますので、目がへこんでしまひました。

なんだかあたりがくらくてこまりす、人のうはさには、やあすてられたの、くににおかみさんが有るといふ人も有ります、私もまッたくすてられたとおもッて居ります、もッとも、ふだんからじやけんな人では有りました、先月私のからだは五月ですから、みてもらッてもよいでせうかとさゝますと、なあにこじきをみると申されまして、とう／＼みてもらひません、なこうどはあをくなッて、

しんばいをして居ります、今日になつてもたよりはありません。

おく様おそれいりますが、三銭おかしなすつて下さいまし、きつてのお金も有りません、いづれおかへし申します、三河島のいここにあひましたときに、こめや、やさいは、なんでも内へとりこいと申してくれましたが、けつしてまゐりません。

おく様ばんちをおしらせいたしますと、又御めいわくをかけますから、いづれどちらにか、はなしのきまりがつきましたせつには、すぐおしらせ申しますから、とうぞわるくおもひなすつて下さいますな、どうぞあしからず、おからだを御大せつになすつて下さいませ、かしこ

あ　　く　　様

ツ　　ル

と書いてあつた。静江は其の手紙を讀んで了ふと、ほろりとして、逆に卷いたのを其のまゝ膝の前へ置いた。新太郎は直ぐそれを取上げて、面白さうに聲をあげて讀みかけたが、中途から聲を曇らして、讀み方がだんぐり低くなつた。老婆は涙ぐんでデット聽いて居た。

四

『お鶴さんは片付いたのでございますか。：あの人も運の悪い人でございますね。』と、稍暫くしてから老婆は言つた。

『さうだよ、そんなとて廢した方がいゝ。そんなにしなくても、もつと何うにかしたとこへ行かれるからツて、家で随分止めたんだがね。：：二十四にもなつてるもんだから、本人もお嫁入りがしたくて耐らん

やうだし、家でも厄介拂ひをする積りて、やつて了つたんだらうが、何んしろステーションのラムプ掃除をしてるんださうで、幾らも取りやしないんだよ。……皆んなにラムプ屋／＼ツて呼ばれてるんださうだからね。」と、静江は痛ましうな顔付きをして言つた。

『けど一寸變つてゐて、面白い男らしいね。貧乏でも、お鶴には過ぎた人物らしいし、お鶴はあんな人の好いといふだけで、ぐづの、氣の利かない奴だから、全く棄てられたんかも知れんね。……郷里から兄が病氣だとか何んとかいふ狂言電報を打つて貰つて、孕み女を置き去りにして逃げたのかも知れないよ。痛快なことをする奴だ。』と、新太郎は想像を混せて、面白さうに言つた。

『けども、ほんとに棄てる積りなら、男も馬鹿ですれ、棄てたつて棄て切れるものぢやない。』

『ほんとうでございますね。……』

『女は矢ツ張り女だけに、女の方へ同情するんだね。』と、新太郎は静江と老婆とを等分に見やりながら言つた。

『お桂さんとこみたいにな、男を棄てて逃げる嫁があつたり、またお鶴みたいにな男に棄てられる女があつたり、世の中て妙なもんだね。……可哀さうに、お鶴も提灯行列一つ見ないで、御飯も喰へずにお腹を空かして引ッ込んでるんだね。』と、静江は溜息を吐いて言つた。

『しかし、何んとも分らんよ。随分變人ださうだから、……全く歸つて來ない積りなら、そんな山の上の方へ引ッ越せなんて、わざ／＼手紙をよこしやしないよ。……何んでも驛長が、勉強して辛抱すれや眼をかけて引き立てゝやるツて言つたら、こんなとこで辛抱したつて詰りません、幾ら出世したつてあななく

らゐのもんでせうッて言つたさうぢやないか。兄貴は郷里で選舉權まで有つてゐるらしいし、そんな無責任なことは、本人がする積りでも、兄貴がさせやしまひとも思ふがね。今日あたりひよッこり歸つて来てやしないか。』と、新太郎は上は目を使つて考へながら言つた。

『兎に角私、これから一寸行つて見て来てやりませうかね。親爺は片付いてから一度も顔出しをしないんださうですし、婚禮の盃は媒酌人の家でしたんださうですから、第一親爺はお鶴の家も知らないのてせう。……身持ちて喰べるものもないといふんですから、何んな無分別をするかも知れませんが、馬鹿ですからね。』と、靜江は少し興奮して來た。

『だッて番地が分らないぢやないか。あいつも江戸ッ見て、鼻ッぱしの強いところがあるから、無心を言ふやうに思はれちや厭やだと思つて、番地を知らさないんだね。』

『なアに媒酌人の番地が分つてますから、彼處へ行けや知つてゐてせう。』

『それぢや米の二三升に金の一二圓も持つて行つてやるとい。……随分奉公もして歩いたやうだが、お前には一番敬服してゐるんだから、行つてやると喜ぶだらう。』

『ぢやアさうしませう。……お鶴もいゝが、顔を見ると直ぐ泣かれるんで厭やになつちまう。』と言ひく、靜江は立ち上つて支度にかゝつた。

『ほんとに御親切ない、奥様で、……今時何處へまゐりましたッて、そんない、御主人はありや致しません。』と、老婆は言つて、汚れくさつた袖口で眼を拭いた。

『阿母さん、僕も連れて行つて。』と、夏雄が迫がむので、靜江は、

「お鶴がね、御飯も喰べられないでゐるから、阿母さん一寸行つて来てやるの。可哀さうだらう、夏さんの好きなお鶴ちゃんいかね。夏さんはね、今度上野の動物園へ連れて行つてあげるから、今日はお父さんとお待ちしてるの。」と賺しながら、派手な銘仙に着更へて、新調のコートを引ツかけ、忙がしさに三重簞笥の上の小抽斗を開けて、真珠の入つた指輪を一つ簞めた。

「私もお暇致しませう。」と、老婆もしよんぼり立ち上つた。

五

日が暮れても静江が歸つて来ないので、新太郎は表を通つた買ひ付けの豆腐屋に頼んで、川端の蒲焼屋へどんぶりを二つ誂へ、その来るのを待ち構へて、夏雄と二人で喰べた。母が居ないので、夏雄は兎角元氣がなくて、表へ美しく提灯が點し列ねられても、花火のあがる音が頻りに聞こえても、餘り外へは出なかつた。今までは左程にも思はなかつた父子の情が、この小さな人間の毬栗頭から沸き出して来るやうに思はれて、新太郎は紺飛白を着た夏雄の全身をじろくく見廻はした。夏雄は溫和しく瀬戸物の大火鉢に凭れて、火箸で灰を掻き廻はしてゐた。

便所へ行つても、表へ郵便函を見に行つても、夕刊新聞の投げ込まれたのを拾ひに行つても、其の度毎に夏雄が後から隨いて来ては、

『お父さん、何處へ行くの。』と、心配さうに訊くので、新太郎はこの小さなものに氣を兼ねて、二階の書齋へも上ることが出来なかつた。女のらしい駒下駄の音が表に響く毎に、夏雄は首を傾けつゝ耳を

澄ましたが、家の門の戸が開かないので、失望してはまた火鉢の灰を掻き廻はした。

八時頃、夏雄のそろ／＼眠くなりかけた時分に、静江は漸く聞き覚えのある駒下駄の音を立て、歸つて来た。門の戸が開くと、夏雄は頓に元氣付いて、

『阿母さんだ。……』と嬉しうな顔をしたが、急にまた考へ付いた風で、コロリと横に轉けて、眠つた眞似をした。

『そんなところへ寝かしといたら風邪を引くぢやありませんか。』と、静江はコートを脱ぎながら、夏雄の圓くなつてゐるのに眼を注いだ。スルと夏雄はひく／＼身體を動かし、『バア』と言つて起き上つたので、静江は笑ひ／＼土産に買つて来た小さな電車の手遊品を袂から取り出して與へた。

『何うだ分つたかね。』と、新太郎は火鉢の火を掻きおこしながら言つた。

『えい、媒妁人の家といふのへ行きますと、お鶴が取り次ぎに出て來たんですよ。……取り次ぎと言つたつて、二室ばかりの家ですが、私を見ると喫驚してゐるんです。奥では何んだか物を片付けるやら大騒ぎのやうでしたが、私は直ぐお鶴を連れて彼女の家へ行つたんです。……山の上の二軒長屋で、近所にもそんなに汚ない家はありませんし、見晴らしがよくて、いゝところですよ。……これまで居た家は山の下で、汚ない五軒長屋の並んでるゴミ／＼したところだつたさうですが、今度の家は疊が新しいので一寸綺麗ですよ。あれで壁でも塗り替へると、いゝ家になりますね、六疊と三疊で三圓ですつて、安いもんぢやありませんか。あれでもお鶴には過ぎてますよ。前桐の箆筒とね、家から與つた鏡臺と針箱がチャンと置いてあるから面白い。……全て仕事が出来ないのだから、針箱はほんとの飾り物ですね。』と、静江はよそゆき

の着物のまゝべたりと坐つて、喋舌り立てた。

『亭主は何うしたんだね。』

『まだ歸つて来ないんですよ。手紙をよこして、郷里からお客を連れて歸るかも知れないから、山の上の方の小綺麗な家へ引ッ越して置けと言つて来たところを見ると、棄てる積りでもなさうなのですが、しかし何んとも分りませんね、勤めてるステーションの方へは一週間と言つて、其の届けを出した切り何んとも言つて来ないのださうですから、もう歸つて来ても元の通り勤めることは出来ないのださうです。病氣とても言つて届書を出して置くと、一月ぐらゐ休んだつてまた出られるんですツて、それを其のまゝにして行つて了つたんですから、事によると歸つて来ない積りかも知れませんね。』と、静江は膝に凭れかゝつて来る夏雄の頭を撫でく言つた。

『兎に角お鶴は弱はつてたらう。』

『それは弱はつてるんでせうが、何んだかケロリとしてゐましたよ。自分のことだか他人のことだか分らないといつたやうな顔をしてるんですもの。……私もねあの泣き蟲で、一寸したことでも直ぐ泣く女ですからね、屹と毎日泣き續けて、眼の縁を泣き腫らしてるかと思つたら、莞爾くしてゐるんですもの、私何んだか折角意氣込んで行つて、當てが外れたやうな氣がしてよ。……彼女には自分の一大事が足元へ火のつくやうに迫まつて来てゐるといふことが、分らないんでせうか。下らないことには、めそくとよく泣く癖に。……』

『食物は何うしてるんだね、喰へずに居るなんて嘘なんか。』

『いゝえ、あの女がそんな嘘の作り事なんか言へやしませんよ。……全くあの手紙に書いてあつた通り、僅かのお米で重湯のやうなお粥を拵へて啜つてゐたんですが、其のお米がなくなると、水ばかり飲んで二三日喰べずに居たんですって、……媒妁人は自分がそんなところへ世話をして氣の毒だつたと言つて、昨日から自分の家へ連れて来て御飯を喰べさしてゐるんださうですが、昨日はお鶴さんの眼が窪んでたが、今日はまだ癒つて了つたつて笑つてゐるさうですよ。何んしろ媒妁人だつて、あのステーションに勤めて、操車とかいふことをして七十二錢の日給ださうですから、あんな孕み女なんか引き受けちゃ迷惑でせう。』

『だつてそりや仕方がない、自分がそんな無責任なところへ世話したのだから。』

『孕んでさへ居なけりや、また家へ置いてやつてもいゝんですがね。追々寒くなるから、私も助かるんだが、何んしろ六月にもなつた大きなお腹を抱へて、肩で息してゐるんですもの。』

『もう餘ッほど大きいかね。』

『彼女は上はッ孕みて、目立つ質らしいから、随分大きいんですよ。』と、静江は痛まし氣な顔をした。

『駄目だねえ女は、バツシイプだから、生理的に駄目だ。幾ら威張つたつて。……』と、新太郎は獨り言のやうに言つた。

『幾ら威張つたつて、男には子が生めないぢやありませんか。』と、静江は獨り言のやうに言つたが、急に思ひ付いた風で、

『丁ど親爺が來たんですよ、私が行つてるところへ。……それやきまりのわるさうな顔をしてましたよ。』

『親爺で、お鶴の親爺か。……あの周旋屋。……何もお前にさまりわるがることもなからうが。』

『だッてきまりがわるいてせうよ、十歳の時から他家へ奉公に出しといて、全て構ひ付けなくて、片付く時にも、何一つ拵へてやらないで、簞笥だッて兄が買つて呉れたんでせう。それにほら、奉公してる時家で拵へてやつた着物だの、他で拵へて貰つた着物を預つといて、二三枚も質に入れてなくして丁つたことも、私が知つてゐるでせう。……親でゐて親顔は出来ないんですからね。今度のことだッて、餘んまり親の方で構ひ付けないもんですから、あんなことになるんでせう。親さへちやんとしてれや、あんなとこへ嫁がなくツたつて、もツと何うにかしたところがあつたでせう。』と、靜江は相手が眼の前にも居るやうに、怒つた聲をした。

『こども、子供もあの親爺のやうにして育てると、金もかゝらないし、面倒がなかつていゝね。』と、新太郎はまた面白さうにして言つた。

『けれどもね、あの親爺は若い時からめかし屋ださうですからね、今でも身形はチャンとしてゐるんですよ。』

『家へも一度來たことがあるね、一昨年だツたか、池上の本門寺へお詣りした歸りだッて、鼠色の十徳みたいなものを着て來たぢやないか。……あれを着て少し腰を曲げながら入つて來たところは、死んだ落語家の圓喬によく似てゐると思つたよ。……瘦せてるだらう。』と、新太郎は圓喬の藝の神に入つてゐたことを思ひ出した。

『周旋屋も此頃は駄目なんですツて、……戦争で地所や家の値が下がつてゐるし、幾らく安くツても賣買がないから、今に周旋屋の干物が出來ませう、ツて、そりや江戸ッ兒ですから、親爺は口前が巧いんですね。』

『あの親爺を一人困らせる爲めに、大勢の人や國が根氣よく戦争をしてるんだと思へや、干物になつたつて諦めが付くだらう。』

『それでもね、江戸ッ兒ですから、人に愛想をすることは好きなんですからね。何處かへ行つて直ぐお鮓とビールをさう言つて來ましたよ。……それからお鶴がね、ワツブルを五つばかり持つて來ましたよ。郵便切手を買うお錢もないのに、何うしたのかと思つて、不思議でならないんです。』と言ひく、靜江は夏雄が電車を持つたまゝ母の膝を枕に安心して眠つたのに氣が付いて、脱ぎ棄てたコートを引つ張つて窃と着せかけてやつた。

『亭主は歸つて來さうかね。』

『何うも分らないんですね、何んだか變な男らしいんですから。……しかし兄といふのが、確乎してるんですもの、棄てるなんてそんな亂暴なことはさせないだらうと、媒妁人は言つてるさうです。離縁するなら離縁するで、何んとか話を付けるてせう。まだ籍は入つていないんですが、何うしても歸つて來なかつたら、お鶴が大きなお腹をして、出かけて行くといふんですね、秋田ださうですが、汽車を下りて直ぐなんですつて、……其の男の籍もまだ兄の家にあるんださうですから、兄の家へ乗り込んで行けやいゝんです。』と、靜江は自分のことのやうに調子付いて言つた。

『何んしろ遠いから厄介だね。』

『けどお鶴も馬鹿ぢやありませんか、先月取る日給を皆んな置いといたんださうですから、一人ですもの、ヂツとして居れや、食べる物もなくなるやうにはならないんですが、山の上の方へ引ツ越せと手紙で言つ

て來たので、正直に引ッ越して、其のお金は半分から引ッ越しに使つて了つたんですッて、…男の方ぢや日給を残らず置いて來てやつたんだから、そんなに困つてはゐないと思つて、便りもしないのか知れませぬね。』

『親爺は何んと言つてる。』

『おふくろの手前まことに困りますなんて、勝手なことを言つて、頭を搔いてゐました。繼母だから義理がありまして、なんて世間並のことを言つてましたが、義理があるから、娘を構ひ付けなといふのも妙ですね。』と、靜江は皮肉な笑ひ方をした。

『お鶴といふ奴も妙な奴だね。薄情で冷酷なやうなところがあるかと思ふと、またひどく人懷ッこいところがあつて、得體の分らない女だよ。』と、新太郎は深く研究でもする風に、仔細らしく首を傾げた。

『ほんとですわね、私には妙に懐かしがつて、久し振りに會つた時なんぞ、よく涙を零して嬉しがりですが、空涙を零して人に取り入るといふやうな智慧はないんですから、お鶴の涙はほんとうの涙で、慾得離れて人を慕うといふやうな、極く人情に厚いところがあるんですけど、他の人にはまた涙も引ッかけないといふ風を見せたりするんです。』

『兎に角、いづは不具ぢやないか知らん。…京橋の方の砂糖屋に居た時、店の者としてくッ付いて、二人とも暇を出され、親爺が男の家へ手切れ金を取りに行くといふ騒ぎの時にも、あいつは家へ來て耻かしさうな顔もしないで、ケロリとしてゐるんだものね。…あの時でもさうだつたし、今度まア兎に角正式の結婚をしても、男に對する戀とか情とかいふものは、でんでないんだね。色男でも亭主でも、あいつは往來

の人同様に思つてゐるやうだね。それも合はせもの離れものなんていふ理屈や意地張りから來てるんぢやなくて、あいづは唯ぼんやりと、靈肉の外に突ツ立つてゐるといふ風が見える。…不具なのか、何んなのか、全で分らないぢやないか。…』

夫婦はお鶴の噂で、だん／＼に夜を更かさうとしてゐた。外からは遠く人のどよめきが、何時までも絶えなかつた。

六

それから二三日の間、毎日／＼町は沸き返るやうな賑やかさで、其の尻尾が場末から郊外にまで延びて來て、人々は旗や提灯の中に浸り、花電車や山車や藝妓行列の噂で持ち切つてゐた。新太郎はあまり外へも出ず、二階の書齋に閉ぢ籠つてゐたけれど、人々の浮かれ立つ心は、新酒の薰りのやうに、この二階へまでも舞ひ騰つて來て、酔はさなければやまぬといふ風に、何時もの如く、ヂツとして書物に親しんでゐるだけの落ち付きを與へなかつた。或る朝、新太郎がこれから二階へ上らうかと、茶の間の火鉢の側で腰を浮かしかけてゐると、夏雄が表で、

『阿母さん、お鶴が來た。』と呼んだのが聞こえた。さうして、暫くするとまた夏雄が、

『阿母さん、お鶴泣いてる。』と言つたが、やがてお鶴は夏雄に手を引ツ張られて、茶の間へ入つて來た。家に居た時に比べると、五つ六つからも一時に年を取つたやうで、窠れ果てた顔に淋しい笑ひを浮べつゝ、もう霜やけの出來かゝつてゐるらしい兩手を支へ、膨れたお腹は兩袖で隠す風にして、叮嚀に挨拶をした。

くる／＼と櫛巻きにした頭は、烟突の掃除棒のやうに、無造作な恰好をしてゐた。

『迫て束髪にでもしてたらい／＼ぢやないか、あんまりだらしないくしてゐるから、愛想を盡かされるんだよ。……何うだね、歸つて來たかい。』と言ひ／＼靜江は、便所から出て來た。お鶴はまた丁寧な挨拶を繰り返へした上、

『いゝえ歸つてまゐりません。……音沙汰なしてございます。』と、莞爾／＼して他人のことを語るやうに言つた。

『挨拶も上手になつたし、矢ッ張りおカミさんらしいね。』と、新太郎は茶の間の入口の丁ど先日お桂婆の坐つてゐた邊りへ、お桂婆のやうに畏まつてゐるお鶴の姿をしげ／＼と見て言つた。

『髻に結ひますと、こんな貧乏長屋で目立つて可笑しいと申しますし、束髪に致しますと、ハイカラで可けないと言ひますし。仕様がございません。』と、人一倍頭髪を氣にする質のお鶴は淋しさに、櫛巻きの頭へ手をやりながら言つた。

『だつて今家に居ないんだし、歸つて來るか歸つて來ないか分らないもの、言つたことを、チャンと守つてゐるには及ばないぢやないかね。』と、靜江は齒痒さうにした。

『お鶴も年を取つたね、二十五かね、六かね。……家へ初めて來た時は、たしか十六だつたね、飛白の着物に赤い帯をチョキンと締めて、あの森の中の家に居た時で、大きな栗の木があつて、頭の上へ毛蟲が落ちると言つて、かん／＼したお天氣の日にも傘を翳して歩いたぢやないか。』と、新太郎は其の頃の自分の生活をも一所に回顧しながら言つた。

『昔のことはもう澤山でございます。』と、お鶴は差し俯伏いた。

『媒妁人から一つ、其の兄さんといふ人の家へ精しく手紙に書いて問ひ合はして貰つたらしいぢやないかね。』と、静江はまた齒痒さうにして言つた。

『お前の亭主はお前を打つたかね。』と、新太郎は飽くまでもこの事件から興味を惹き出さうとする風に見えた。

『打ちました。…拳固でゴツンと直ぐやります。』

『泣いたかね。』

『泣きました。…随分痛うございますから。…ズウ／＼て口が廻らないものですから、直ぐ拳固を出すてでございます。』

『お鶴は直き泣くんだね。』と、夏雄は父の背後から言つた。

『亂暴だね、花嫁さんを打つなんて、…』と、静江も可笑しくなつて來たらしかつた。

『お鶴、花嫁さん、…』と、夏雄は何時ものやうに眼を圓くして、不思議さうな顔をした。

『坊ちゃん、厭やてでございますね。』と、お鶴は可愛くて耐らんといふ風に眼を細くした。

『お鶴、夏さんをお前に與らうかね。』と、静江は戯れたが、お鶴はたゞ笑つて夏雄にばかり見入つてゐた。

『お鶴は自分の腹の中に居る子さへ持て餘してるのに、こんな惡戯坊主を貰つて何うするもんかね。』と、新太郎は夏雄の顔を振り返つた。

『厭やだい、お鶴の子になんかなるもんかい。…お鶴の子になつたら、御飯が喰べられないんだらう。』

と言つて、夏雄は表の方へ駈けて行つた。

『ほんとにお可愛いんでございますね。』と、お鶴はまた眼を細くして笑つた。其の薄皮で細面の顔には小皺が寄つてゐると思はれるほど、老けて見えた。

『あの子の生れる時から家に居て、赤ん坊の時ずうと世話をして來たものだから、お鶴は夏さんが特別に好きなんだね。』と、静江も我が子に眼のないやうな風で言ふと、お鶴は心底から同意するらしく、
『左様でございます。』と點頭いて、夏雄の出て行つた方を見詰めた。

『前のお父さんが來た時もさう言つてたよ、あいつは妙な奴でございまして、宅にはたとへ腹違ひでも弟が居りますのに、一向可愛がりませんし、他家様のお子さんでも今までさう可愛がりましたことはございせんのに、お宅の坊っちゃんのことだけは、歸りますと口癖のやうに申しまして、知りもしない子のことなんか聞きたくないと、おふくろによく叱られとります、ツてさう言つてたよ。さうなのかい。』と、静江も夏雄の出て行つた方を見ながら言つた。

『お鶴はお米がなくなつて御飯を喰へずに居たんださうだが、幾日喰へなかつたんだい。』と、新太郎はお鶴に言つて、妻の言ふ我が子の恹氣を避けようとした。

『お米がなくなりましたので、お芋を買つて來て戴いたり、お鯉節とお醬油がございましたから、お汁を拵へて、餛飩粉のお團子を落したのを戴いたりしました。お錢は少しございましたが、三錢や五錢お米を買ふことも出來ませんので、お芋や餛飩粉を買つてまゐりましたのでございます。』と、お鶴は約しやかに物語つて、淋しく笑つた。

『随分苦しかつたらう。』

『其のお錢もなくなつて了ひまして、丁ど二日半何も戴かずに水ばかり飲んで居りましたのでございますが、何んにも戴きませんと、だんく卑しくなつてまゐりまして、お腹の空き切つて居りますとこへ、お隣のお味噌汁の匂ひなんぞを嗅ぎますと、お腹がグウグウ鳴りまして、赤ん坊が食べたがるのかと思ひました。』

『其處へ媒妁人が来て、家へ連れて行つて、御飯を食べさして呉れたんだね。…厄介なお嫁さんを世話したもんだ。』と、新太郎は矢張り面白がつてゐるやうであつた。

『あゝお鶴、お桂さんがこなひだ來たよ。丁どお前が手紙をよこした日だよ。』と、静江は珍らしいことを思ひ付いたやうな風で言つた。

『左様でございますか、あの人も運のわるい人でございますね。…私こんなにつてまゐりますと、お桂さんのことを始終思ひ出して居ります。何んだかお桂さんにきまりがわるいやうな氣が致しまして。…』と、お鶴は差し俯伏した。

『さうだ、お前もこのまゝで行くと、お桂さんの二代目だよ。…いゝえ、私はお桂さんみたいに御飯も戴けないやうにはなりません、つてよくやつてたがね、家に居る時分。…』と、静江も少し面白がるやうな調子になつた。

『全くてでございますね。』と、お鶴も我れながら可笑しいやうな氣がして來たらしかつた。

『不景氣な話ばかりしてゐるね。…町が賑やかさうだから、提灯行列でも見て、少し浮かれたらいいだら』

う。』と、新太郎は大きな欠伸をした。

『町が綺麗ださうてございますが、私はチツとも見たくないでございませう。……一つ三萬圓からの門が建つたと言つて、近所のおカミさんは皆見にまゐりましたが、歸つてまゐりまして、大層綺麗だつた、宛て夢の國へ行つて來たやうだと申して居りました。其の三萬圓の門も直ぐまた壊して了ふんださうてございませうね。……』と、お鶴はさも惜しさうな、泣き出しさうな顔をしてゐた。

三萬圓の華やかな縁門を背景にして、この貧しい、哀れな孕み女が、泣き笑ひをしてゐるのだなあと思ふと、新太郎は俄に心が引き緊つて來て、これは面白がつて居る場合でないといふ氣がした。

『旦那様に御覽になつて戴かうと存じまして、……』と、お鶴は汚らしい風呂敷包から、戸籍の謄本を始め、男の所有物らしい、さまざまの書類を取り出した。

其の中には、男の兄の宛名で大隈……とか加藤……とかいふ官吏の連名になつた、刷物の長い手紙も混つてゐた。(完)